
Dies irae × I S

ドレイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dies irae x IIS

【NZード】

NZ6569NZ

【作者名】

ドレイク

【あらすじ】

この話は、IS世界のキャラをDies iraeのキャラ風に人格改变したお話です。一夏が司狼っぽくなり、筈が蓮っぽい人格となつて色々と騒動を引き起こします。

第一話

私が剣術に没頭するのは、ひとえに連綿と受け継がれてきた技術を受け継ぐことに至福を感じていてるからだ。満ち足りていくといつてもいい。

勿論、初めは気乗りしなかった。私は何氣ない日常こそが好きだつた。その気持ちを言葉にできない子供のころから、ずっと。だからこそ、そんな日常とは対極の方に位置する武道なんて、関わるだけでも嫌だと思っていた。

幼馴染の腐れ縁に言わせれば、私の思想はキチガイ以外の何物でもないらしい。故あって家族と離れ離れになってあいつの家に住むようになつてからは、よくそのことで口論になつたものだ。

曰く、人生は未知の刺激というスパイスがあつてこそ、そんな腑抜けた人生なんぞ死人のそれと全く変わらない。それに。

「お前は変わらない日常を愛しているんじゃねえ、変わらないままの刹那く輝きこそを愛してるんだよ」

などと言われたこともあつた。中々どうして、人の事を見ている奴だと思います。その言葉はするりと私の中に入つて、違和感なくぴつたりと奥底に嵌まつた感じがした。

「お前はありふれた日常の中にも輝きを感じて。だからこそその輝きがいつまでも続いて欲しいと思つていいだけで、変化そのものを嫌つてはいるわけじゃないだろ?」

思えば、私は子供のころから美術品を鑑賞することが好きだった。

実家が神社を営んでいたりする関係上、寺社仏閣の貴重物を見る機会も多くて、そういうときはいつだって時間を忘れて見入っていた物だ。

成程、確かにそう言った物は、いつまでも色褪せぬ刹那く輝き>だろう。当時の人々が、狂おしいまでに情熱をこめて作り上げるからこそ輝きを放ち、そう言った物は後世でも評価され続ける。

そんな自分の気持ちに気付けば、剣術の修練というのも、なかなかどうして悪くはなかった。先人達が己の命をかけて築き、連綿と続く命で以つて残し続けた刹那、思えば、そのなんと輝いていることか。

その一端に触れるというのは、体力の続く限りいつまでも没頭し続けていたいと思うほどだつた。

こうして、周囲からは剣術馬鹿と称される私が出来上がつたのだった。開けても暮れても剣の事ばかり考えて、洒落た服で己が身を着飾るよりも、古流剣術の術理を収めるほうに注力する。そんな時代に逆行したかのような武骨者の自分が、まあ当の私自身が悪くないと思っているから良しとしておこう。

「…………それにしても一夏、お前はとことん厄介事が好きだな」「いい男には厄介事が付き物なんだよ」

そして私をそんな人物に変えた腐れ縁はといふと、私と同じ教室で減らず口を叩いている。

言つておくがここは明文化されていない物の女子高みたいな場所で、男であるこいつがいられる場所ではない。

織斑一夏。染め上げた金髪に捲り上げた学生服の袖からは刺青が覗く、見紛うことなきチンピラだ。

そんな奴がここ、IIS学園に何故いるかと聞かれれば答えは一つ。

「イツがISを動かしてしまったからだ。

何でも高校受験の会場にあつたISを面白全部で触つてみたら動かせてしまった、といつゝとらしこ。

「第一お前、女尊男卑にどっぷり染まつた奴を嫌つていただろうが」「ん？ ああまあ……それ差つぴいても面白そじやねえか」「それでお前にとつてしてみれば地獄の様なここに来た、と？」「そうそう、元から選択肢なんてない様なもんだろ？ 要は気持ちの持ちよつと。自發的にここに来たつてことなら精神衛生の面でもプラスだろ」「

相も変わらずプラス思考だなコイツは。身に降り注ぐ厄介事全てを未知の刺激としてとらえて、面白事に変えている。

正直言つて、コイツの事は馬鹿としか思えない。出会つた時から一貫してぶれないその性根は、ここまできたらいつそ見事と言えるのだろうな。

私には決して真似出来ない、そして真似したくない姿勢だと思つ。騒動に塗れた日常なんて御免こひむる。

「 ちょっと、よろしくかしら？」

ああ、早くも厄介事の足音がすぐ後ろまで来ているようだ。全く、私を巻き込んでくれるなよこの馬鹿。

「聞いておりますの？」

「あれ、オレっ！」

「明らかにお前に視線を向けているだろ？が、よかつたな、早速役得じやないか」

「うええ、これが？」

「見た目は綺麗じやないか」

「ばっかお前、よつどりみどりの」の状況、気にするべきは中身だ
「うが」

「...」

「」んな見た目からして高飛車そうな女、ちょっと引くわ」

心底嫌そうな表情を見せる一夏。まあ確かに、声をかけてきたこの女性は見た目からしてきらびやかな雰囲気を纏っている、いわゆるお嬢様という奴だろう。

「え……聞いて「ああ、私もちょっと近づきたくないタイプだな
ますのつ……！」

「聞いてない」

不本意たがこの黒鹿と同じく

聞いてまでね。そんな反応逃せるくらいには耳障りでないよ！

「よし、では聞いてやる。要件は何だ?」

「何でお前はそう偉そうなんだよ

「だつてオレほんの学園で唯一の男子生徒だぞ？」
希少性でいえば

「螺旋階段の魔羅ニシテ」

「お前よつね井いだよ」

「わねせ」ハ、めの獄謎だ」の謎體——謎」

どうやら話しかけてきた人物は一夏のノリについてこられなかつたらしい。絶叫を迸らせて肩で息をしている、御愁傷様だといつておく。

私が彼女の立場なら絶対近づきもしないだろう、實に度胸がある。

「一夏、そろそろひやんと聞いてやれ」

「そうですね、世界唯一のHSを動かせる男がどんな人物か見定めて差し上げようかと思いましたが、まさかこんなちやらんぽらんな男だったとは」

「んなもん頼んでねえよ、小さな親切大きなお世話って知ってるか？」

「んなつ！？」

せっかく会話になつたとこのに、早速一夏の言葉で顔色を失う少女。まあでも、最初から話を聞いていたところで結果は変わらんよつた気がするがな。

「まあそつ言つてやるな、上から目線でも一応は善意だからな」「それでもどつせこの後には、「無様なあなたに、この私が教授して差し上げますわ」とかいうんだぜきっと」

「ああ、それはすぐ想像できるな」

「だろ？」

「くつ……所詮は男といつことですかつ」

そう言い残し、彼女は踵を返した。恐らくは、一夏の想像が図星だったのだろう。ああまで言い当てられては、引き下がるしかなかつたらしく。

「やつぱりお前、厄介事に縁があるな」

「楽しそうでいいじゃねえか」

「私は全然楽しくないな。場所は特異でも、平凡な学生生活を送りたかつたよ」

私の苦言にも、一夏は悪童そのものの笑みを返すだけ。そんな表

情を見ていれば自然と溜息が流れてしまった。

流れ出た溜息は、すぐに教室内の喧騒に溶けて消えた。周囲からは突き刺さる視線が私にも感じ取れるぐらいに一夏に注がれている。普通の年頃の女性ならば、こんな環境下で出会う唯一の男性に興味を持つのだろうが、そうして現れたのがこんないかにもなチンピラでは、興味よりも怯えが先立つのか、こうして遠巻きに見ているだけ。

それをこの馬鹿はわかっているのに、一切省みようとは思つてない。どうせ、女尊男卑などと謳つているくせに外見一つでビビつて奴なんぞ、こちらから願い下げとか思つていいんだろう。

それならいつも、「男のくせに生意氣だ」とけんかを吹つかけてくる奴の方が面白いし、相手をするだけの価値がある。そんな戯言を心底思えるような奴だ。（さつきの少女はまあ、からかい甲斐がありそうだったから、ああいう結果になってしまったが）

「さて、クラス代表を決めようと思つ」

教壇の上で教師としてみれば若輩ながらも、威厳に満ちた美声が響く。あの馬鹿とは似ても似つかないが、彼女の名前は織斑千冬と言つて一夏の姉だ。

性格は一言でいえば謹厳実直。少なくとも公の場所でふざけた言動をすれば、即座に鉄拳制裁が飛んでくる。そんなのが唯一の肉親であるにもかかわらず、あれだけふざけた言動を一貫して続けられる一夏の馬鹿さ加減には、ほとほと頭が下がる。

そしてその馬鹿さ加減を、一夏はまたもや発揮してくれた。このIS学園において公式行事というのはエサによる試合がメインだ。クラス代表というのはその名の通り、クラスの威信を背負う物だ。

自薦・他薦は問わない。という千冬さんの声を受けて、真っ先に上がったのは一夏の名前だった。怯えはしてもそれはそれ、やはりクラスどころか学園唯一の男子生徒を、表に引っ張り出さないという発想は無いのだろう。怯えた声で一夏を推挙するクラスメイトが何人かいた。

「 納得いきませんわっ！！」

響いた怒声は、先程一夏に声をかけた彼女の物だった。縦ロールで綺麗に整えられた金髪を振り乱し、その白磁の様な顔を赤く染めて、彼女は一夏をクラス代表にする愚を語り始める。

「クラスの威信を背負う代表を、このような軽薄な人物に任命するわけにはまいりません。おまけに、ただI-Sを動かすことができるという素人にそのような大役が務まるとは思えません！！」

全く持つて、実に真つ当な言い分だった。これっぽっちも反論できる材料が無い。

「I-Jのセシリ亞・オルコットのよう、実力ある者がなるべきですわ」

胸を張つてそう言った彼女、セシリ亞に対し一夏の反応は。

「ああ、セシリ亞って名前だったのか、アンタ」

そう言えばあの時、セシリ亞は名前すら言わせてもらえなかつた

な。というか、私も今ようやくセシリアの名前を知った。

「い……言つに事欠いて、今更私の名前を知ったのですかつ、あなたはつ……」

「いや、お前自己紹介もしないまま帰つただろ」

「け……」

「け？」

「決闘ですわつ！！」

「もうお前にとやかく言つのは疲れた。勝手にしてろ」

この全自动トラブル製造機め。何で入学初日から決闘騒ぎが起きたんだ。コイツは何かトラブルを誘引する未知の物質をまき散らしているんじゃないだろうか。

「おう、勝手に楽ししませてもらひや」

激怒したセシリア嬢が発端となつて、“クラス代表決定とは何の関係もない”決闘が一週間後に取り決められた。クラスメイトはこの決闘の勝者がクラス代表になると思っていたみたいだが、千冬さんがこの馬鹿に権力と名分を持たせては何をするかわからないと、この決闘の勝者に関わらずセシリア・オルコットがクラス代表になることは決定済みだ。

普通ならばこんな経緯で決闘騒ぎが起こるなんてありえない。聞くことによるとセシリア・オルコットはイギリス代表候補生で、まさに専用機持ち。

対して一夏の馬鹿は今までISの操縦経験がない素人で、専用機の方も本当なら支給される筈だったが、『何か成果を上げたわけで

もないのに、どこかの誰かから施し受けろってか？ はつ、冗談きついぜ」と、日本政府の担当者の前で啖呵を切り、そこから喧々諤々の議論の末に何も手を加えていない量産機を支給するということになつてゐる。ガンとして意見を曲げない一夏と、防犯上の理由から是が非でもIJSを所持してほしい日本政府との、それが妥協点だつた。

とりあえず一夏の機体は、明日にでも納入されるらしい。射撃の方を得手としている一夏に合わせて、中距離射撃戦に比重を置いた仏・デュノア社製第一世代型量産機「ラファール・リヴィア・イブ」をわざわざ日本の倉持技研がライセンス料を支払つて持つてきたという。

「しかしお前、勝ち目はあるのか？ 端から負ける覚悟で戦いに臨むほど、お前は殊勝じやないだろ？」

私の問いかに、一夏は変わらず悪童の笑みを浮かべてのたまつた。

「まあ……なんとかするさ」

小賢じにコイツの事だ、本当に何とかするだろ？ 倦怠感にも似た呆れがその身を弄る。一うなればこいつを叩きのめして憂きを晴らしてやると意気込んで、持つていた木刀に力を込めた。

一夏は非合法の手段で入手した黒光りするオートマチック サイレンサー付きのデザートイーグルを構える。中学のころから入り浸つていた不良グループなどとの繋がりは未だ残つてゐるようだ。私との勝負には拳銃を持ち出してきては、子供のころはエアガンに始まり、今やデザートイーグルですらなんなく片手打ちできるほどに拳銃を扱いなれてゐる。

しかし、そうしたところでよくもIJS学園にまでそんな物を持ちこめるものだと感心する。しかもそんな物を、人気のない校舎裏と

はいえよくも平然と取り出すとは、恐らくは「」も監視されている筈だが。

「おーおー、ほさつとしてんなよ

素人目にもわかる出鱈目な曲撃ち。乾いた音と共に飛来したプラスチック弾、ノーリアクションで放たれたそれを、しかしその攻撃を予測していた私の木刀が弾き飛ばす。

私とコイツの勝負に、開始の合図など在るわけがない。不意打ちを食らったほうが間抜けということだ。

迫る試合に向けて、実戦の勘を研ぎ澄ませたいと一夏は放課後に申し出た。とはいへこんな勝負など常日頃からやっているので、今更な申し出ではあった。

私が剣術の修練にのめり込むようになつてから、一夏は事あるごとに勝負を吹つかけてきた。曰く、お前に先を行かれるなんて我慢ならない、と。

そうして日を追つになると、年を重ねるごとに繰り返された勝負はエスカレートし続け、今の様な本気の喧嘩染みたものになつてしまつた。

竹刀ではなく、硬い木刀を遠慮なく振るい。プラスチック弾頭とはいえ、実銃をむやみやたらにぶつ放す。傍から見れば殺し合いにしか見えない、そんな異常な光景。

私の斬撃が、アイツの銃撃が、互いの皮膚に切り傷を作り、勝負の果てに武器をとり落とせば、そこから先はただの取つ組み合い。磨いた腕も、重ねた経験、そんな一切を無視しての格闘戦。至る所に走る鈍痛が熱を持つて私の脳髄を茹で上げる。

「コイツにだけは負けたくない。そんな餓鬼の意地としか言えない熱気に浮かれる頭で、いつも私は思うのだ。

よくもこんな異常を、私の日常へ輝きへしてくれたな

そんな物騒な日常に寮の門限ぎりぎりまで没頭し、何故が同室になってしまったいた寮の自室にて、競い合ひよにへたり込む。

「あ～くや、また引き分けか」

「いい加減に負ける、一夏」

「馬鹿言え、負けるのは筈の方だ！」

精も根も尽き果てて、そのまま眠つてしまいそうになる欲求に抗いながら、それでもやるべき事があった。

「なあ一夏、お前をぶちのめして日頃のうつぶんを晴らすのは、私だけの特権だ」

「ああオレも、お前に負けるのは嫌だが、他の誰かに負けるのはもつと嫌だね」

それだけ確認できれば十分だった。一夏は反骨心の塊みたいな奴だから、ならばきっと、奇手奇策小細工何でも使って、必ずどうにかするだろう。

一週間というのは、本当に短い時間だ。あつという間に勝負当田となつて、私はアリーナの管制室で千冬さんと一緒に一夏とセシリア・オルコットの試合を観戦しようとしていた。そのほかにも、クラスの副担任である山田先生も詰めかけている。

「どう見ます？ 織斑先生」

やはり教師といえども、世界唯一の男性操縦者がどのような戦い方をするのか気になる様で、メガネの奥に好奇心を湛えながら問いかける。

「まあ、普通ならばオルコットの勝ちと見るがな……あの愚弟の事だ。どうせ何がしかの小細工をするに決まっている」

その言葉に、私も内心同意する。アイツくラファール・リヴィアイブ>が届いた後の実機訓練で、何か閃いたのかものすごく嫌な笑顔を浮かべていた。

あれはきっと、また何か下らない小細工を考えついたに違いない。そんな奴がただ一方的に負けるということなど、私も千冬さんも想像すらしていない。

その時、試合開始の合図がアリーナ内に鳴り響き、ディスプレイの中に映っていた二機のI-Sも同時に動き出した。

反発する磁石のように、瞬時に距離をとるくラファール・リヴィアイブ>とくブルー・ティアーズ>。

初手は同時、I-S用の中でも最大の口径を誇る大型ハンドガンを両手にそれぞれ持つた一夏と、専用の大型レーザーライフルくスター・ライトMK?>が同時に火を噴く。

交差する鉛玉と閃光は、しかし互いに空を切つた。一夏の顔にはいつもと変わらない人を食つたような笑みが、オルコットの顔には一夏の予想外の攻撃に一瞬だけ強張った表情が張り付いていた。

「成程、ただの的ではないようですね」
「はっ、ほぞいてろっ」

そのまま空中で三次元機動をこなしつつ、的確な狙撃を行うオルコット。精妙で優雅な機動を行い一つの狙撃は、オルコットの自負に見合つた精度で行われている。

幾度もの閃光が一夏へと降り注ぎ追い立てていく。そんな物を喰らつてはいる一夏の方はといふと、それでも笑みを絶やさず……いや、あれはより面白がつているな。ともかく、表情だけには苦痛を見せず必死に逃げ回る。

それでも逃げ回ることができてはいるあたり、素人とは思えない操縦だった。しかし、素人とは思えないだけで、間近の比較対象であるオルコットの機動と見比べれば、その差は歴然だ。

「オルコットさんもすごいですけど、織斑君もすごいですね」

確かに、完全にずぶの素人である一夏がここまで持つてはいるのは、普通ならば驚愕以外の何者でもないのだ。

「一夏ちで身体状況を見る限りでは、理想的な興奮状態を維持しているみたいですし、初の実戦だつて言つのに緊張とか無いんですねか」

その山田先生の言葉に、知らず私と千冬さんの嘲笑が重なつた。

「「くくっ、あいつが緊張？」」「
「そんなに笑いを堪えることでしたか！？」
「当たり前だろ、あの愚弟が緊張？ あると思うが筈」
「あり得ません、あいつにそんな可愛げがある筈が無い」

私たちの反応に、山田先生はどう返していいのかわからぬようだ。私としては一緒に笑つてやればいいと思うがな。

そんな会話が流れるときにも、一夏は曲芸の様に出鱈目な、それ

でいて的確な狙いの射撃を連発し、オルコットを牽制している。酷い時となると、視線なセシリアをとらえていないのに、それでも銃弾は「ブルー・ティアーズ」の至近を通過したぐらいだ。

いくらEVAが操縦者に全方位の視界を与えるとはい、その適応能力の高さに舌を巻く。

「それにしても織斑君射撃が上手ですね」

まさか常日頃から実銃ぶつ放しまくっているとは、口が裂けても言えなかつた。

「ああ、あの愚弟は“なぜか”射撃が上手くてな」

全てを知つてゐる筈の千冬さんが、意味ありげな視線をこちらに向けつつそうこぼした。というか千冬さんは全て知つてゐる。何せ一夏が発端となつた騒動に私ともう一人の幼馴染が一緒になつて巻き込まれ、最後は千冬さんの強力な拳骨を喰らうのが、少し前までの日常だつた。

そのせいでも千冬さんは、一夏の悪事など事細かに知つてゐるし、そのたびに虐待一步手前の制裁を喰らわせているが、それでの馬鹿が更生するなんて言うことは一切なかつた。

……本当に反骨心の塊みたいな奴だな、ひねくれ過ぎだろう。

「本当に粘りますわねっ！！」

苛立ち交じりの声と共に、「ブルー・ティアーズ」から四つの飛^ビ翔体^{ット}が分離する。自律行動するそれは、まるで主の命を受け獲物を狙う獵犬の様に一夏を追いたてる。喰らい付くのは牙ではなくビーム砲だ。

「おいおい、そんなのありかよ」

空になつた弾倉をグリップから排出し、新たな弾倉をグリップ内部に量子展開しながら、襲いかかる四つの獵犬に対し愚痴を漏らす。

「あら？ ここにきて怖氣付かれたのかしら、それとも降参したくなりましたの？」

「バ～カ、こいつこいつで勝つてこそ、株が上がるつてもんだろ？」

追い立て続けられながらも、その眼に宿る闘志には微塵の揺らぎもない。いやむしろ、今こそが勝負どころだと思ったのか、一夏は追いすがる四つのビットを無視して、ハンドガンを格納し、両手に手持ち式のシールドを開発する。

「大言壯語した割に、行つことが特攻とは浅はかですわねつ！…」

真正面からくるのならば、ビットを使わずとも、スターライトMK？による射撃で十分と判断したのか、強力無比な閃光が一夏の手に持つシールドに赤く溶けた弾痕を刻む。

現用火器に対しても圧倒的な防御力を誇る筈のシールドは、たつた数発のレーザー照射で爆碎されて用を成さなくなる。

「いいや、ここまで近づければ十分だ」

だが、ある程度は距離を詰めることには成功している。

そう投擲物が当たるぐらには、一夏とセシリヤの距離は縮まつていた。

それはぱつと見る限りでは、何がしかの爆発物なのかと思わせた。ハンドグレネードか、あるいは音響閃光弾か、それで隙を作ろうと、いつ心算だらうか。

「そんな物が奥の手？ 無意味ですわ！」

身を翻し直撃コースから外れ、例え爆発やら閃光やらが飛び出したところで、E.Sのシールドはそれらを完璧に防ぐだらう。

セシリアの言つ通り、一夏の奇策は不発に終わるのだらうか。そんな表情が観客の生徒や山田先生の顔に張り付く中、私と千冬さんは全く別の事を考えていた。

（（…………あの缶詰、あの馬鹿まだ持つっていたのかつ！？））

そもそもあれは武器でも何でもない缶詰じやないか。去年あの馬鹿が話の種としていくつか買って惨劇を引き起こした、ある意味劇物の缶詰。最早食用としても期限切れとなつて、完全に生ごみと化した缶詰を、一夏はセシリアの間近で撃ちぬいた。

そう、世界一臭い食べ物として有名な、シユールストレミングの缶詰を、だ。

飛散する内容物、完全に発酵しきつてドロドロの液体と化したそれが、弾丸によつて空中にぶちまけられて、最早匂いの毒と称せる様な臭気をばらまいた。

臭気という極小の微粒子に、E.Sのシールドが自動で反応する筈もなく、オルコットの整つた鼻筋に開いた鼻腔が蹂躪される。

オルコットの顔が、予期せぬ刺激に歪み苦悶の表情を浮かべる。

「ぐつ！？ 何なんですかこれはつーー！」

流石のHSでも、極悪な腐臭からは操縦者を守らなかつたらしい。設定すれば防げるだろうが、何処の世界にHSへそんな設定をする馬鹿がいるのか、あんな臭いを間近に食らつてオルコットの動きが止まる。

「オレの秘策。といふことで俺の勝ちだな」

そして、あらかじめそういう設定をしていた馬鹿は、何の影響も受けずにオルコットとの距離を詰め、零距離からのハンドガン全弾発射で「ブルー・ティアーズ」のエネルギーを零にした。

一応は一夏の勝利といふことで幕を閉じた決闘の後、オルコットは一夏に鬼の形相で詰め寄つた。

「あなたつ、あんな手段で勝つなどと恥は無いのですかっ！…」
「はあ！？ お前本気で言つてんの？ 俺が素人だつてわかつていいだろ！」

「それとこれとは話が別です！… 私が言いたいのは、素人ならば素人なりに真面目におやりなさいということですっ！…」

千冬さんや私がいる前で、オルコットは至極真っ当な反論をした。したつもりだつたのだろう。少なくとも彼女にとつてしてみればそれはその通りだつたが。

「お前馬鹿かよ」

「なつー!?

一夏の反論に、言葉を失つた。齟齬が無い理論展開を前にしてすら、未だ私を侮辱するのか、とその表情だけでも明確に読み取れた。

「ああ確かに、オレは素人で、E-Sの試合って言つてはありゆる面でお前に負けるよ。けどな、だからこそ、オレはお前に勝つために持てる物全て使つた。少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ」

そんな一夏の“らしい”言い分に、つい顔がほころんでしまいそうになる。それは私だけでなく、千冬さんも同様だったみたいで、その顔に苦笑を湛えながら二人の間に割つて入つた。

「そこまでにしておけオルコット、確かにこの馬鹿の手段は手放しで褒められるものではないが、それでもお前が最初から全力で臨めば、こんな結果にはならなかつただろつ」

「…………それ、は」

「悔しいと思うのならば、それを糧にして増長することの愚かさを学べ。そして今度この馬鹿と一戦交えるときは完膚なきまでに叩きのめしてやるといい」

「ええそうですね、私がこの程度だと、こんな下劣な男に思われたままでは私のプライドに関わりますーー」

「その意氣だ、オルコット」

氣炎を燃やすオルコットを見て、千冬さんは満足げな笑みを見せ、一夏もまた面白そうだと笑顔を見せた。

「やつぱつ！」は画面をひだるなあ、 篠

「ふん、こいでもまたお前の騒動に巻き込まれるかと細つと、頭が痛くてかなわない

それでもなお、皆上ひられて笑ってしまつのが、無性に腹
が立つて仕方がなかった。

第一話（後書き）

＜あとがき＞

ルートとしては先輩ルート後、一夏は司狼の転生体で篠は蓮の転生体です。篠の方は蓮の成分が薄まっていますが、一夏の方はがつつい色濃く残っているという感じで、そして鈴はバカスミポジション。そして一夏のISが単一能力を発動した場合、間違いなくIS版のマリグナントチューマー・アポトーシスになるでしょう。

第一話

「織斑、一夏」

身に染みついた悪臭を更衣室のシャワーで洗い流しながら、私に屈辱を与えた人物の名を呟いた。その呟きはすぐに水の流れる音に搔き消されたが、それでも、その名は胸の奥に宿り続けている。

あの男は最初から気に喰わなかつた。髪を染め上げ、タトゥーを入れて、その見た目からして下劣な雰囲気を漂わせていた。

そんな状況だから、他のクラスメイトは彼を怖がつて遠巻きに見つめるだけ。唯一の例外と言えば、確か篠ノ之箒という名前のクラスメイトだけ。ならばそう、この私が状況を変えるきっかけになろうと意を決し話しかけてみれば、端から私の話を聞こうともしなかつた。

嘲笑うような口調でこちらを煙に巻くだけ、正直言つて何故篠ノ之さんはこんな男と親しげにしているのか、まったくもつてわからなかつた。何一つとして美点が無い男。ただE.Sを動かせたというだけで、名譽あるE.S学園の門をくぐつた不届き者。完全に素人だというのならそれ相応の立ち居振る舞いがあるはず。素人だという状況に胡坐をかいてはいけないはずだつた。

「でも……あの言葉は」

そんな人物をクラスの代表にさせまいと義務感に駆られ、決闘を挑んだ。そのこと自体に否は無い。

一時の腑抜けた気分での男を代表に選び、そうしてクラスメイト全員に屈辱が降りかかるなど、決して受け入れることができなかつた。

だからもう、自分がどれほどの事を分不相応にも行おうとしてい

るのか教育してやるうと思に立ち、あの決闘に臨んだ。

そう、元から試合をしようと思つてすらいなかつた。

『少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ』

不意打ちをされて、腐つた生ごみと化した缶詰を投げつけられて、耐えがたい腐臭を擦り付けられて、でもそれら全ては、私を強敵と認め、自身より格上と認め、それでもなお勝ちをもぎ取らうと足搔いた結果ではなかつたのか。

引き換え、私はどうだつたか。驕り高ぶり、あの男を世の中に溢れかえる牙無き腑抜けた雄と同一視し、教育してやると手心を加えた。ビットを使つまでもないと、戦力の温存などといつ手抜きを行つた。

「負けて 当然ですね」

そう、当然だつた。負けて当然だつた。私の半分の力を、あの男の全力が打ち破つた。私こそが、あの決闘において不面目に過ぎたのだ。

降り注ぐシャワーの冷たさが頭の芯を冷やし、私の脳髄に宿つていた驕慢という余分な熱を洗い流していく。代わりに浮きあがつくるのは、なぜこんな自明の理に思い至らなかつたのかという悔恨。

悔しかつた。

悔しい、悔しいに決まつてゐる。元から私の掌の中になつた勝利は、

私自身が取りこぼしてしまった。後悔は、後の祭りだからこそその後悔なのだと、理屈ではなく実感で思い知つた。

もしも もしもの話だ。あの決闘において驕ることなく、初手から全力での男を叩き伏せていれば、今なお心中に渦巻く悔恨など抱えることなく、クラスの威信を背負つていけた筈だつた。

そんな未来はもう無いのだ。これからはずつとこの悔恨を抱えて、クラス代表などという物をやり続けなければならない。

「くつ……くつ……ああ……」

嗚咽が堪え切れずに溢れ出る。伝う涙が、どうしようもなく熱かつた。何がイギリス代表候補生だ。何がクラス代表に相応しい人物だ。私は、そんな肩書に全く相応しくなかつた。

試合直後はまだあの男に対する怒りがあつた。けれど熱は、時間の経過と共に冷めゆくのだ。最早この悔しさの矛先として至当なのは、自分自身だけだつた。

悔しい。後悔。悔恨。そんな感情が渦巻いて、降り注ぐ水の様に、自分自身も墮ちていく錯覚を味わう。思考も視点も定まらない。底無しの沼にどつぶりと沈んでいくようだつた。

「あ～、邪魔したか？」

そんな状況では、学園の生徒ならばだれでも使えるこのシャワー室に、誰かが入つてくることなど思い至りもしなかつた。

「……あの馬鹿はああいつ奴だから、仕返しするなら全力でやつてくれ」「え……えつと、その」

「いいよ、別に言葉にしなくとも。公衆の面前でみんな真似やられたんだから」

声をかけてきたのは、つい今しがたまで私の心中を埋め尽くしていたあの男 織斑一夏 と唯一親しげにしていたクラスメイト。

「篠ノ之 篠さんでよろしかったかしり」

「そう、あの馬鹿とは腐れ縁の篠ノ之篠だよ」

溜息をつき、自身で発した言葉が真実であるのが心底嫌そうに感じている様な表情で、篠ノ之さんはシャワーの個室を仕切るドアの前に立っている。私はシャワーを止めて、冷え切った体に纏わり付く水滴をバスタオルで拭き取りながら、個室を出て篠ノ之さんと改めて向き合った。

「とつあえずほれ、購買で消臭スプレーをありつたけ買つてきたか」

突き出された右手に握られていたビニール袋の中には、確かに消臭スプレーの缶がぎっしり入っていた。もしかしなくともこれは私の為に買いそろえられたものだろう。

「あ、ありがとう」

とりあえずの礼を述べて、篠ノ之さんの手からビニール袋を受取る。それは、私の為に買つてくれた物。“負けた私の為に”買つてくれた物だ。

きつと篠ノ之さんは、私の事を慮つて買つてくれたのだろう。あの悪臭はきついからなかなか取れないだろうと、些細な気遣いのもとに行つた行為。

「……………」

それが、尚更私の心を抉った。突き刺すよつた敵意なら、憤怒と敵愾心で対抗できる。けれど、優しく溶け込む心がくじにどう抗えというのだ。自分自身が直視に耐えないほどに、とつもなく惨めだった。

「それじゃ、私は帰るよ」

膝をつき泣き崩れる私に対し、篠ノ之をんは何も言わず踵を返し、何事もなかつたかのように立ち去つた。

今のは惨めな私に対し、同情も憐れみも何もかけることなく、立ち去つてくれた。グチャグチャに渦巻く感情が心中を満たす中でも、その気遣いだけはありがたいと感じることができた。

シャワー室を出た後に私を出迎えたのは、更衣室のベンチで葉巻を吹かしていた織斑先生だった。小さな灯がともる葉巻の先から立ち上る煙が私の鼻腔をくすぐる。生憎と、葉巻の煙自体は嗅ぎ慣れない物だったので、決していい香りだったとは思えなかつたが、それでもあの時の悪臭に比べればいい香りと断言できた。

「大丈夫か？」

「それなりには、頭は冷えています」

正直にいえば、織斑先生がこんなことを言つとは思わず、応えを返す時もそんな心境が表に出でていなかつた。

「さうか、似合わんか。私が生徒を気遣うのが

訂正。しっかりと私の心境は悟られていたようだ。

「まあ、長いこと洗いつぱなしだつたのは、それなりに効果が出たようでなによりだ」

「ええ、いろいろ流せました」

「なら、一つだけ聞こう。

クラス代表、やれるか？」

織斑先生は、葉巻を携帯灰皿の奥底にねじ込んで火を消し、真正面から私の瞳を見据え短く問うた。

「勿論」

逡巡はある。躊躇もある。あんな無様を晒してもなお、それでもクラス代表などと虚勢を張るのか、といつ血虚の気持ちもある。

「やる限つは、眞面目にやられさせていただきます」

それでも、これは自分に課せられた役目なのだ。それをたつた一度の失敗で、もう恥の上塗りをしたくないからやりたくなりませんなど、不真面目の極みだろう。

ならばここで逃げることこそが恥だ。そんなことをあの男に知れようものなら、死んだ方がましだ。

故にこみあげてくる諸々一切を飲み込んで、私は精一杯の虚勢を張つた。私は出来る限りの最善を尽くすと、眼前の女傑に対して声高々に言い切つた。

「そりゃ、なら頑張れよ

織斑先生はただ、何處となく満足そうな微かな笑みを浮かべて、そう言った。

その日の夜遅く、私は寮の屋上で一人たたずんでいた。流れる夜風が私の頬を優しく撫でていき、あまりにも激動の一日であった今日の疲労を溶かしていく。

「何だ、お前もここにいたのか

「奇遇だな、オルコット

ほとほと、今日という日はこの一人に縁があるらしい。私の頬を撫でた夜風が、染め上げた金髪と、リボンで纏められた黒髪を撫でていった。

二人の手にはジュースやらスナック菓子が少々多めに入ったビニール袋がある。それを持ってここに来たということは、恐らくそういうことなのだろう。今日は夜風が心地いい上に、雲ひとつない夜空には星の瞬きが映し出されている。シチュエーションとしては最適だろう。

「……私はここで失礼しますわ

そんな場所に、私が居ていい筈がない。この場所でこれから行われるのは勝者の宴。断じて敗者の居場所ではない。

「おいおい、付き合い悪すぎるだろ

二人の横を抜け、屋上から降りようとした私の腕を、織斑一夏が掴んで引き留めた。そのまま私を無理矢理座らせ、一人も同じく腰を下ろした。

「」のまま私を鬻りものにしようといつ魂胆ですか？」

「え、そういうプレイが好きなお前？ 僕はただ単に一緒に騒ごうと思つただけだよ」

険のある言葉を吐き出す私に對して、織斑一夏は悪戯つ子の様な笑みを浮かべてジュースの缶を差し出した。正直にいえばすぐ自分の部屋へ帰りたいが、差し出された物を無碍に扱うことも少しばかり罪悪感があつた。

だから、私は缶を受け取り、プルタブを上げて飲み口を開けてジュースに口を付けた。大量生産品の安っぽい味が、私の喉を滑り落ちていく。普通のジュースにしては、ちょっとだけ味に違和感があつたが、それでも半ば自棄になつてゐる私にとっては一息に飲み干せる程度でしかなかつた。

「いい飲みつぱりだぜ、セシリ亞」

「生憎と、あなたに呼び捨てられるほど私の名前は安くあつませんが」

「じゃあお前も俺を好きなように呼べよ」

「では、馬鹿で、ああ、この響きはあなたに實によく似合つておりますわ」

「おじおい、そりやあねえだろ」

「何言つてる、お前を馬鹿以外の何と呼べばいいんだ？」

「うわひつでえ、こいつら人でなしだわ。せつかく俺様が和やかな雰囲気を演出してやろうと思つてゐるのこ、こいつらそれを無視してくれやがりましたよ」

「やうか？ お前を馬鹿と呼ぶのは私たちの精神にこの上ない安堵を『与えてくれるぞ』

「どうか、あなたを馬鹿以外と呼ぶとその違和感が私たちの精神にこの上ない負担を『与えますので』」

普通ならば喧嘩を売つてゐるにしか思えない様な私の発言にも、織斑一夏は堪えた様子などまるでなく、それどころかこちらに合わせるかのようにさらにおどけた言葉を返してくれた。篠ノえさんもその流れに乗つてきて、更にふざけた会話の応酬を続けていく。

「チツ、くじんで落ち込んでるセシリアを酒の肴にしようと思つてたのによ」

「当てが外れた様で申し訳ござりませんわ。まあ所詮、あなたなどその程度ということでしょう」

「所詮は馬鹿だからな、馬鹿しかやらん」

「何言つてやがる。決闘であんなにも華麗な頭脳プレイを見せてやつただろうが」

「すまんな、オルコット。見ての通りこいつは救いようが無くてな」

「ええ、そんな物初めてわかり切つてます」

下らない、言葉の応酬。けど、勝者の場所とか敗者の惨めさとか、そんな無為な思考はすっかり抜け落ちていた。

代わりに浮かび上がつてくるのは、こんな下らない事を笑いあえることへの喜び。そう、今私は笑つていた。

意識せずに、自然と、心の底から笑えていた。

「ふふつ、あはははは」

思わず漏れ出た大笑に、一人も笑顔で返してくれた。思えばこんな

なに心の底から笑つたのは初めてかもしれない。

「そうそう、酒の席なんだから笑つてりやあいいんだよ」

「確かに、仏頂面で酒を飲まれるのは勘弁願いたい」

しかし、何故だらう、何かものすゞく違和感があるような。この一人と楽しく会話して、おいしいジュースと安っぽいスナック菓子をつまんでいる。学生同士の下らない小ぢんまりとした騒ぎの筈だ。別になにもおかしいところは無い筈。

「……………って酒とさぞどうこうことですかつー!？」

叫ぶと同時に、飲み干した空の缶に記載されている製品情報を読んでいく。間違いであつてくれとの願いもむなしく、そこにははつきりと酒とこう一文字と、アルコール度数の表記が印刷されていた。

「どうつて? ジュースなんぞで騒げるはずねえだろ」

「それに缶チューハイなんてジュースと変わらん。そつて氣にするな」

「そういう問題ですかつー!」

学校で飲酒を勧めるとは、道理でジュースの味に違和感を感じた筈です。もうすでに私も何本か飲み干した後なので、大声を出すだけ頭がくらべらじます。

「そもそも、学園の購買に酒など売つていない筈でしょ!つー!」

仮にも高校である工学園で酒など売つてゐる筈はない。それなりにやつてここの大量の酒を手に入れたのか、私の問いかけに織斑

一夏はさも当然の様に言い放った。

「ああ？ んなもん姉貴の部屋からかっぱらつてきたに決まってるだろ」「

姉貴？ 織斑一夏の姉とは当然、あの織斑先生の事にきまつている。その織斑先生は学園の寮監も勤めていて、寮内には先生の自室もある。そこに不法侵入し酒を盗んだ？

「正氣ですか？」「

「スリルがあつて楽しいだろ？」「

「自殺行為でしかありませんわつ……」

神をも恐れぬ所業を誇らしげにすら言い切つて、織斑一夏は胸を張つて笑っていた。馬鹿だ。心底の馬鹿が私の眼前にいる。馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、よもやここまで大馬鹿であるとは思つていなかつた。

「篠ノ之さんもこの馬鹿を止めてください……」

「言つて止まるような馬鹿でもないだろ？ 何かあつたらこの馬鹿が全ての元凶どころにしておけ」

そう言つて篠ノ之さんは缶チューハイを新たに一本飲み干した。飲み干した空の缶を地面において、世界の真実を諭す様にしみじみと呟いた。

「だから言つただろ？」「コイツは心底の馬鹿だ、と

「そうでした、この馬鹿は真正の馬鹿でしたわ」

「いついうときは、酒でも飲んでストレスを発散するに限るだ。ほらもつ一本どうだ？」「

「ありがたく頂きますわ」

既に私も、相当アルコールが頭に回っているのだろう。口ではなんだかんだ言いながらも、勧められた酒を勧められるがままに飲んでいく。

「 隨分とまあ、楽しくやつてこるじゃないか、ええ?」

その直後、そんな酔いを完膚なきまでに吹き飛ばす、絶対零度の声が響いた。

「…………織斑先生?」

自分の首がまるで鎧びついた機械の様に重く感じられ、鎧びついた金属の軋む音すら幻聴として聞こえてきやうなほどに、私はゆっくりと振り返った。

そこにいたのは勿論、能面の様な感情を排した表情に、凍て付く冷氣の様な怒りの雰囲気を纏つた、今の私にとっては死神同然の存在である織斑先生だった。

「ああそうだ、あの愚弟に酒をかすめ取られた織斑先生だぞ」

もう完璧、間違いないなく織斑先生は怒り狂っている。

「いや、これはですね、あの馬鹿に騙された結果というか、私は最初酒とは露も知らず」

振り返って元凶である馬鹿を睨みつけようとしたが、そこに
は飲み散らかされた空き缶と、食い散らかされたスナック菓子のゴ
ミがあるだけ。当の織斑一夏は影も形も存在していなかつた。

「 つていないつー？」

見上げてみれば夜空に一つ、星が追加されていた。織斑一夏の駆
る「ラフアーレ・リヴァイブ」のスラスターの光という星が。

「それじゃあお休み」

そして篠ノ之さんもまた、懐から取り出したロープを屋上の柵に
巻きつけ階下に飛び降りていた。それじゃあ後は頼むといわんばかりの表情を浮かべた篠ノ之さんの顔が、夜の暗闇の中へと落下していく。

つまりは、私を含めた三人の中で、ここにいるのは既に私一人。
織斑千冬という最強最悪の死神を前にして、あの一人は私一人を矢
面に立たせてとつとと逃げてくれやがったのだ。

「逃げたあー!? あの馬鹿一人、私だけ置いて逃げやがりましたの
つー！」

「ああ、もう何もいうな。状況などわかり切つてていることだからな、
これだけで済ましてやる」

直後、私の頭頂部に鉄鎧の様な衝撃が降り注ぐ。織斑先生の拳骨
は、すごく痛かった。

「お前の尊い犠牲は、やつと寝るまでは覚えておくれ」

HSとこのつのは、事の他逃げるのには便利だと、一夏は初めてHSとこのつものに嫌悪以外の感情を抱いた。特にあの最強の姉からこうも逃走を成功させるほどの機動力は惚れ惚れすると、世のHS操縦者が聞けば烈火の如く怒る感想を持っていた。

「…………で？ オレ、覗き見るのはいいけど、されるのは趣味じゃないんだよ」

夜の暗闇の中、一夏はだれもいないはずの方向へと言葉をかけた。何も無く、誰もいない。返答など帰つてくるはずもない場所への問い合わせは、しかし。

「あら、勘がいいのね。気配は消していた筈なのに

暗闇から現れたのは、HS学園の制服を身に纏つた一人の女生徒。恐らくは笑みを湛えているであろう口元を扇子で覆い隠しながら、悠然と一夏の方に歩み寄る。その足取りに搖らぎはなく、明確な自信に溢れた物だった。

その性根が、一夏の田には元より豊満な肢体と美麗な容姿を持つその女を、更に輝かせているように見えた。

その姿に、一夏はどことなく自分と似たようなものを感じ取つていた。これはひょっとすると、結構な当たりなのかもしれないとい、自身の口元に笑みを浮かべた。

「「んばんは色女、こんな夜遅くにじりつしたよ、デートのお誘いか？」

「そんなところよ、織斑一夏君。今日の戦い見てたらや、どうしてもあなたとお話ししたくなつちやつた」

「そりや結構、俺の周りにや見る目ない奴多かつたけどよ、アンタみたいな上玉にそう言われるとはね」

「あら、ついてないのね」

「アンタがオレと戦ってくれるなら、ついてこに変わるぜ?」

「あら駄田よ、がつつき過ぎは良くないわ」

「そいつは失敬、何せいい女には縁が無くてね、アンタを逃すと

生縁が無い様な気がしてた

「それにはまづ、聞くべき」ことがあるでしょ、うへ。」

「ああそりだつた、色女わん？ お近づきの呂にマンタの如前教え

ちやくれないか？

その一夏の問いかけに、女は満足げな笑みと、微かな寂寥感を滲ませて自身の名前を口にした。

「樁無更識樁無よ」

女は更識盾無と名乗る、事実その名前は学園のデータベースにも記載されている、彼女の名前としては至極適当な物だ。それでも、一夏にとつては、そうではなかつた。

「おじおじ、オレはアンタの名前を教えてくれって言つてるんだぜ？」

不快感をあらわにして、一夏は余人が聞けば意味不明な言葉の羅列をのたまつた。一夏の耳には、さつきの音の羅列を人の名前として受け入れたくはなかつたから。

「流石、
やがて彼なりに心の壁が崩れると悟つた」

けれどその意味不明な返答にそは、彼女が望んだものだった。それを聞いたかった。君ならきっとそう答えてくれると願っていたから。彼女はさつきとは違つ、一片の曇りもない満足げな笑みを浮かべた。

「テメエが誇れない物が、そいつの名前であつてたまるかよ」

「うん、そうだね。ほんと、君の言うとおりだよ。樁無つてのはね、更識の家が代々当主に継がせていく名前なの。うちの家は古くから世の裏側のあれやこれやを生業にしてきたからや、やうじしきたりが残つてゐる」

「はつ、馬鹿じやねえの、『誰かが継げる名前なら、そもそもそんな名前は塵同然だらうが』」

そう、一夏にとつて、更識盾無といつ音の羅列は、とてもではないうが人の名前とは認識できなかつた。

人の名前とは、そいつ自身が世界に向き合つての唯一無二の証だと、自分自身がそう強く認識しているからこそ、樁無といつ音の羅列の裏にあるものに気が付いた。

「昔はほんとの名前があつたんだけどね、今はもう樁無しか名乗らせてもらえない」

「アンタも災難だな。どうせ古臭い歴の生えた老人どもが、絶やしてはならぬ誇りだ、とかぬかしてゐんだろ?」

そんな物は、今を眞面目に生きている奴にとつては冒瀧以外に他ならないと、一夏は嫌悪感をあらわにする。名前を継がすなら、継ぐべきそいつ自身が誇りを持つてその名前を受け継がないと意味がないだろ?。受け継がせるという行為自体が、その名前を冒瀧しているとなぜ気付かないのかと、一夏はここにいない見知らぬ誰か

に怒りを抱いた。

「色男だね、君は」

その感情が、わかりやす過ぎるほど瞭然に漏れ出しているから、高々数分しか会話していない一夏を、彼女は心底氣に入つた。

「眞面目に生きてる」

髪を金に染め、腕にはタトゥーを入れて、言葉の端々からも滲み出る素行の悪さは、決して眞面目とは評せないだろう。けれども、彼は織斑一夏として世界に向き合ひ眞面目に生きているのだと、彼女は理解した。

「おつよ、オレは眞面目だぜ」

そう言って悪童の笑みを浮かべる一夏に、彼女はせめてこれだけは告げようとした意を決した。

「じゃあさ、私の事はエリーって呼んでよ」

もう彼女の眞の名前は、記録から抹消され、暗示すら掛けられ、当の彼女自身ですら思い出せない。思い出せるのは、自分の名前は樋無なんかじゃないと、そんな古臭過ぎて腐った音の羅列なんかじゃないとこう怒りだけ。

「エリー？」

「そう、エリー。昔読んだ漫画の中の、氣に入つた登場人物の名前

真実の名前はもう既になく、『えられたのは望まぬ黴の生えた音の羅列。ならば、せめて気に入った音の羅列を』が名前として認識してくれと、彼女は言い切った。

「やうか。まあまあいけるんじやねえのか、エリー」

その響きを紡ぐ。ままならない現実に腐る奴らが多い世の中、それでも彼女は腐っていない、前を向いている奴だと知ったが故に、響きに乗せた意思是一夏の心の奥底からの物だった。

「他の誰かがいるときは、そうだね……会長とでも呼んでよ」

「OK、エリー」

「それじゃあ、もう夜も遅いし、私はここにひで退散するね」

そう言つてエリーは踵を返し、再び夜の暗闇の中に消えていく。

「おやすみ、一夏」
「おやすみ、エリー」

交わし合い、刻みあつたその名前だけで、今宵の出来事に価値はあつたと互いに思いながら。

「よくもまあ、この私を捨て駒扱いしてくれましたわねっ……」

翌日。

「ヤツホー一夏、今日も元気そつね」

「……朝も早くから、全開だなお前」

教室に入った一夏を出迎えたのは、鬼の形相で詰め寄るセシリアと、それを面白そうに眺めるエリーの姿だった。

傍らにいた篠が、その光景に心底呆れ果てた表情を見せる中、当の一夏は当然面白そうな表情を湛えている。

「お前だつて飲んでたじやん。どうだつたよ、人生初のただ酒の味は」

「あの後の織斑先生の拳骨の方がよほど記憶に残つております！」

「

「おお、ありや効くよな。あれ喰らつたら一回酔いなんかしないだろ」

「わああ、セシリアちゃんつてもしかして不良？」

「そんなわけ無いに決まつてるでしょ！……そもそもあなた誰ですかっ！」

「……もう死ねよ一夏、お願いだから騒ぎを起こすなら私の田の届かないところでやつてくれ」

キレるセシリア、それを面白そうにからかう一夏とエリー、その混沌とした光景に頭を抱える篠。他のクラスメイトはその光景についていけず、言葉を失うだけだった。

「

あんた本当に変わらないわね

そこに割り込む第三者の声に、クラスの耳目が集まつた。見れば教室の入り口に活発さを滲ませた小柄な女生徒が立ち戻りしていた。

ツインテールに纏められた髪が微かに揺れ、その瞳には眼前の光景に對しての呆れが滲んでいる。

「何だウリ坊、お前日本に帰つてきてたのかよ」

まあ確かに、小柄で活潑そうなその彼女に対して、ウリ坊というあだ名はよく似合っているのかもしない。だがどこの世界にウリ坊と呼ばれ喜ぶ年頃の乙女がいるというのか。

「誰がウリ坊だこりあああああああああつーー！」

混沌とした朝の光景に、小柄な少女による全力全靈のドロップキックが追加された。

第一話（後書き）

＜あとがき＞

会長の設定を生かして、本当に会長をヒートンにしちゃつたぜ。そして鈴はずつとこんな扱い。

あとシャルロットは当然マリイ・ポジなんだけじ、そつすると結構悲惨な目にあうといふか、一番えぐい目にあうといふか。ラウラのほうは原作そのまんまで出すつもりなんですけどね。…………銀髪眼帯ドイツ出身ということから、シユライバー化したラウラを想像しましたが、そんなの書けるわけがねえ。

あたしが　凰鈴音が　あいつらと出会ったのは、小学五年生の時。

「お前中国人なんだろ?」

「だったらリンリンって呼ばぼつぜ、パンダみたいで似合つてんじやん」

「うるさい、私パンダなんかじゃないもん!」

子どもというのは結構異物を排斥したがるものだ。クラスの中で唯一の中国人であつたあたしは、クラスの悪戯鬼どもにとつては格好の獲物、よつてたかられてからかわれ続けた。誰もあたしの訴えに耳を傾けてくれなくて、あたしに出来たのは泣きながら叫び続けることだけ。

「　　うわくつせえ、ひんまがつた根性つてこんなに臭いんだな。つうわけで消えろよカス共」

「　　見苦しい。お前らつひざいから消えてくれ」

そんなとき現れたのがあの一人、一夏と篝だつた。あいつらは出会った時から変わらなくて、厄介事に率先して首を突つ込む一夏に、心底呆れたような顔をしながらも篝がついていく、そんな今と全く変わらない雰囲気を纏つてあいつらはあたしの前に現れた。

「何だよお前ら!..」

「何つて、決まってるじやねえか。お前らつひざいから消えろつてことだよ」

「Jリーフちは十人以上いるんだぞ、勝てると思つてんのか」

所詮は女の子いじめる様な屑どもだから、臆面もなく数の利を誇示して一夏と笄を恫喝した。けど、あの二人はそんな物一顧だにしないで、むしろそれがどうしたといわんばかりの小馬鹿にした笑みを浮かべた。笄なんか無表情に見せかけた嬉々とした表情で、笄を刀のよう構えていたし。

「じゃあ私は武器を使おう、私は女でか弱いからな、骨折つても知らんぞ?」

「なつ! ? お前卑怯だぞ! ! !」

「うつわ聞きました笄さん? 」 いつも寄つてたかつて一人の女の子苛めていたのに卑怯だなんだとぬかしましたよ? 心底屑だわこのいつが。というかお前それ駄洒落? 箒が笄構えるなんて寒すぎるぜ うおわつ! ?

「よしわかった、先にお前をぼーる」

「……舐めてんじゃねえぞ、この糞があつ! ! !」

最早いじめつ子どもなど眼中になく、笄の放つ一撃を軽やかに避けまくる一夏。そんな一人の様子にいじめつ子どもは我慢ならないといった感じで一人に襲いかつた。

「バーカ、テメエらなんぞくらいたとJリーフ意味ねえよ

「半分はやれよ、一夏」

「むしろJリーフの台詞だつての」

結局、いじめつ子どもはあつけなく一夏と笄に返り討ちにされた。あたしはそれをボーッと見ているだけで、結局何もできなかつた。

「……あ、ありがと」

できたことと言えば、いじめっ子もが全員叩きのめされてから、助けてくれた一人に礼を言つぐらう。でもこの一人はずつと、素直といつ言葉から縁の無い奴らだったから。

「別にお前の為じやねえよ、このカス共が不快だつたからぶちのめしだだけさ」

「ああ、見苦しい上にすかすかといつちの視界に映り込んできたからな」

素直じやないその答えが、とつても重なつたものだつたから、口ではなんだかんだ言いつつも、この一人はきっとすごく仲がいいんだろうなつて思つたの。転校してきたばつかで友達なんかまだ誰もいなかつたから、その時あたしには一人がすつごく眩しく見えた。

「ねえ、私の名前は凰鈴音。その 友達になつてくれない？」

だから、私もその中に混ざれたらいいな、つて思つたら、自然とそんな言葉を言えた。

「おういいぜ、特別に友達にしてやる」

「……好きにしろ、この馬鹿と比べたら誰だつてましだ」

捻くれた返事だつたけど、二人はあつさりとあたしを受け入れてくれた。それが、一人との騒がしくも楽しい日々の始まりだつた。

そして今日、一年ぶりに再会したその親友たちは。

「ふふおつー？」

「ぐはつー？」

「「」の馬鹿共が、よくもあんなふざけた真似をしてくれたな」

千冬さんに強烈なアッパーを喰らって、とてつもなく見事な車田落ちを披露してくれた。

いやもう、普通は一年ぶりの感動の再会なんじゃないの？ とか思つたけど一夏の馬鹿は初っ端からあたしの事をウリ坊呼ばわりするし、ついついそんな馬鹿に対してもロップキックをかましてしまうし、勿論そんな一撃を一夏の馬鹿がまともに食らうわけ無くて、あつさりと避けて「久しぶりだな、おい」とか言いつつあたしの頭を撫でまわしてくるし、筈も一緒に「久しぶりだな、ウリ坊」とか言つて頭撫でまわしてくるし、そりや、正直言つてあたしの頭を撫でてくれるその感触に涙ぐみそうになつたけどわ、もうちゅうつとう、感動的な再会にならなかつたのかしら。

「何をやつてこる」の馬鹿共、もうチャイムは鳴つてこるわ

そしてそういうつまづいてるうちに千冬さんが登場。しかも元から威圧感たっぷりの人だつたけど、なんか当社比120%増して威圧感増えてたわね。それでその千冬さんは教室内に入つてくるや否や、一夏と筈にアッパーを喰らわせて今に至るというわけ。

ああこれは絶対、一夏と筈がなんかやらかしたなつて思つたわよ。よくもまあ、あの千冬さんの逆鱗に触れる行為を懲りずにやれるわね。絶対一夏がやらかした行為に、筈が口ではなんだかんだ言いつ付き合つてたと思う。見れば、教室内にいた金髪縦ロールの奴も、千冬さんの一撃を田の当たりにして頭抑えてる。あれはきっとあの

子も千冬さんの一撃をくらったことあるわね、私も一夏の馬鹿行為に巻き込まれて喰らったことあるけど、すつしく痛いのよね。ああダメ、思い出したらあの痛みがぶり返してきやう。

「…………ほんと、何にも変わって無いわね」

そんな、一年前にあたしの元から過ぎ去った日常は、あの楽しい田々は変わらずここにあった。一夏は相変わらず馬鹿だし、篠は自分は馬鹿じやないと大人ぶつてたけど、その実一夏と同レベルの馬鹿だし、一人は何にも変わっていなかつた。

「泣くなウリ坊、今生の別れつてわけじゃないからよ。向こうで腐つてるんじやねえぞ。俺たちはずっと“ここ”ここるからまた会いに来いよ。その時はまた、一緒に騒げりつ」

一年前のあの時、空港での別れ際、そう言つてあたしの頭を撫でてくれた一夏はちゃんと約束を守つてくれていた。そのありふれた、けれども大切な光景に、涙が溢れ出しそうになるのを堪え、あたしは自分の教室に戻つた。

もうちよつと話して居たくはあつたけど、少なくともこれから三年間はあの馬鹿たちと一緒にいられるから。それに、これ以上いたらあたしまで千冬さんの一撃喰らうしそうだつたからね。

「…………とりあえず、昼休みになつたら一緒に飯食べましょ」

「おうっ」
「ああっ」

そんな何気ないやり取りこそが、あたしが日本に帰つてきたこと

を実感させた。

「とりあえず、酒が無いのが寂しい限りだが、ウリ坊の帰国を祝つて乾杯っ！」

「だーかーらーっ、ウリ坊つて呼ぶなあつ！！」

「ともかく、鈴が元氣そで何よりだ」

「う、うん、筈もね、一夏共々変わらず馬鹿で安心したわ」

「……おい、あいつと一緒にするな」

約束通り、あたしたちは昼休みになつたら集まつて、食堂で再会を改めて祝い合つた。学生らしく健全に、アル「ールなど一滴も入つていなオレンジジュースでの乾杯を交わし、というか絶対一夏の奴酒があつたら酒で乾杯しようとしたわよね。

「ねえねえ一夏、この可愛らしい子紹介してよ」

「そうですね、あなた達の知り合いにしては至極真面目な方ですし」

なんか一夏たちも友達増えてるみたいだけど、……ビラじりこつ、どいつもこいつも胸に駄肉いっぱい付けてるのよ。そのあまりある肉にしつこよこせ。

「おつ、コイツは凰鈴音。俺と筈の幼馴染だ。まあ気軽にウリ坊と呼んでやりやあいい」

「そう、私は更識楯無、このHリ学園の生徒会長よ。ちなみにあだ名はHリーって言つの、よろしくねウリ坊ちゃん」

「私はセシリア・オルゴット、一組のクラス代表兼イギリスの代表

候補生ですか

それぞれ自己紹介してくれたけど、セシリアって奴はともかく櫛無つて奴、なんか一夏とおんなじ匂いがするわね。早速あたしのことウリ坊呼ばわりしてくるし。というかエリーって何なのよ、櫛無つて名前からどうしてエリーってあだ名が出てくるのかしら。

「ふふつ、気になるつて顔してるわね、けど黙田よ、それは私と一夏だけの秘密なんだから」

「べつに、気になつてなんかいないわよ」

「あら、可愛い拗ね方しちゃつて、ねえ一夏」

「元からこいつはこんな小動物チックだからな。いじられて拗ねてる方が可愛いんだよ」

エリーの肩を引き寄せた一夏は、またそんなことをのたまつている。その様が妙に馴染んでいたから、ちょっとだけむかついた。むう、別に一夏が誰と仲良くなつても構わないけどさ。

「な、オルコット、コイツにはウリ坊つてあだ名がぴつたりだろ?」「クスッ、ええ、確かにそうですね」

ああもつ、簫とセシリ亞もなんかこっち見てにやけてるし。全員そろつて何なのよその生温かい視線はつ。

「あ～つ～！もう何なのよつ、なんでそんなに微笑ましそうにしてんのよあんたたちはつ～！」

「いや、だつて？お前相変わらず小動物チックで可愛いなつて共通認識が構築されただけだろ?」

「まあ、確かにな」

「うんうん、可愛いよ、ウリ坊ちゃん」

「ええ、可愛らしいですわよウリ坊ちゃん
「うが～つー！ ウリ坊ウリ坊言つなかつー！」

ああもう、何で「ひちは怒り続けるの」あんたたち微笑みつぱなしなのよ。ああそう、そういう対応するのねあんたたち、じやああたしの実力って奴を見せつけてやろひじやない。

「あんたたち、今日の放課後アリーナに集合ー！ そこであたしの実力を見せつけてやるわつー！」

「OK、いいぜ」

「はあ、わかつたよ」

「了）解」

「ええ、期待しておりますわ」

「そう、ここまであたしが怒つてゐるのに、結局みんなに張り付いた微笑みは消える」とはなかつた。

「よく來たわね、あんたたちー！」

「当たり前だり、面白そつだし」

「……お前に恐怖心を抱けつて？ 無理言つなよ」

「駄目よお、調べたらウリ坊ちゃんつて中国の代表候補生なんだつて、だから実力は折り紙付きな筈よ」

「普フツ、國家代表ウリ坊つて、また可愛らしいですわね」

うん、こいつらほんとに変わつてない。加わつた面子も加わるべくして加わつたような奴だし、遠慮なんていらないよね。

とりあえずあたしは即座に自分の愛機である「甲龍」を展開して、

巨大な青龍刀一本を連結させた専用武器である「双天牙月」を、一番あたしの事をウリ坊呼ばわりして的一夏に振り下ろした。大気を揺るがす唸りを伴った振り下ろしが、一夏がいた地面を大きく碎く。

「　　おいおい、あぶねえな」

「うん、やつぱり一夏のことだから、この程度の不意打ちぐらい避けると思ってた。大きく飛びさがつた一夏の体は既に「ラフアール・リヴァイブ」に包まれてて、その両手にはハンドガンが握られている。

「不意打ちなんて喰らう方が間抜け、なんでしょう？」

「おうおう言つてくれるねえ、それでこそ、だ」

ISに乗つっていても変わらない出鱈田な曲撃ち。けれども的確な狙いが付けられた弾丸は、つい先ほどまであたしがいた空間を打ち抜いた。

「お？」

「ふん、アンタのへなちょこ玉なんか当たるもんですかっ……」

「はつ、吠えてるよ」

「それはこっちの台詞つ……」

あたしは「双天牙月」を手首のモーターを急速回転させて、一夏の銃撃を防ぐ楯とした。同時にそのまま突っ込んで一夏の懷へと飛び込む。そこで「双天牙月」を分離させて、一刀流へとスタイルを変更する。

「あらりそらりそらり……」

未だハンドガンを両手に握りしめる一夏に対し、あたしは両手に持つたく双天牙月^くを振り回し、多方向からの連撃を放つ。近接格闘において、銃器と刀剣を持った者、どちらが有利かなんて言つまでもないだろ？

「ほらっ、どうしたのよ一夏！…」

「はっ、ぬかしてろっ！…」

「まだ素人と言つて差し支えない一夏に対し、あまりにも遠慮がなさすぎると思われるかもしね。事実一夏は防戦一方、けれど相手は一夏なのだ、これぐらいでちょうどいい。」

「ほら、反撃行くぜえ」

「」うちの連撃の隙間を縫つて、アイツのハンドガンが火を噴いた。その一撃は的確に、今振り下ろさんとしていた右のく双天牙月^くの柄元を狙い撃つた。狙い澄ましたタイミングで放たれた銃撃は、こつちの連撃に間隙を作る。その隙に一夏は大きく距離をとり、アイツの得手である中距離戦の間合いとなつた。

「すげえな、鈴

「何よいきなり」

「何つて、お前一年前まではISなんて縁が無かつただろ？ それで専用機まで与えられて代表候補生にまで上り詰めたのは純粋にすげえと思つたのさ」

「……う」

あの馬鹿に手放しこつも褒められると調子が狂う。第一あたしが頑張れたのつて、アンタと籌に追い付けるようになりたいって思つてたから。

「だから嬉しいのさ、遣り甲斐がある。越えるべき壁があるってのは幸せなのさ」

「ふ……ふんつ、相も変わらずプラス思考よね、アンタつて「当たり前だ、一回こいつきりしかないオレの人生、何でマイナス思考で生きなきゃいけねえんだよ」

一夏はぎつと、子供のころから何かに向かって生きていた。勉強だったり喧嘩だったりいろいろ。だから、あの一夏にこう言わると、その、なんか、いやばゆく感じるわ。

「つうわけで、今はお前に挑ませてもいいぜ」「はっ、上等……」

そんな問答を終えて、再び動き出すあたしと一夏。けれど失念していた、こんな状況でもう一人の幼馴染が黙つてている筈ないってことに。

「ノリノリなのはいいがな、私を忘れるな」

「打鉄」に身を纏つた筈が、当然の如く一夏に斬りかかった。だけど一夏が、よりもよつて筈の不意打ちに反応できないはずがない。神速の早撃ちで筈の斬撃に自身の銃撃を当てた。

近接戦用ブレードと、ハンドガンの弾頭が正面衝突を起こし、筈の斬撃を一夏にまで届かせない。

「おひ、ワリイワリイ、鈴の奴に夢中になつてた」「……というか私たちも無視しないでくださいまし……」

「 そうよねえ、特に一夏、君は私を無視しちゃダメでしょ？」

そこに降り注ぐマシンガンとレーザーの雨。同時にセシリアとHリーのISの情報が、私の視界に映し出される。イギリス製第三世代型ISくブルー・ティアーズ」と、ロシア製第三世代型ISくHスティリアス・レイディ」。

「どうあえず、過日の借りをかえさせていただきます！..！」

言つや否や、くブルー・ティアーズ」から四つのビットが分離し、一夏へと狙いを定める。一夏はそれを、初心者にしてはまあまあの機動で避け続ける。多分あいつは一対多の喧嘩に明け暮れていたから、機動自体は慣れでも多方向からの攻撃には慣れているんだろう。でないとああまで避けられる筈がない。

「一度見た奴が早々通じるかよつ！..！」

そして一夏の器用さは半端じゃない。襲いかかるレーザーの雨の隙間を縫つて、遠く離れるセシリア自身へと銃撃を撃ちこむ。確かに情報じやあ、イギリスのBT兵装は本体との同時使用はできないと。いう欠陥があつたはず。それを本能的に察知した一夏の銃撃は、例え牽制程度でもセシリアの攻撃の手を緩めることに成功していた。

そしてそこが、私の攻撃チャンス。

く甲龍」の第三世代兵装、空間圧縮による衝撃波を使用した不可視の砲撃、く龍砲」を起動。セシリアの猛攻を切り抜けた一夏へと

放つ。

「グゥツ、なんだ今の？」

それでもその不可視の一撃を、直感だけで直撃を避ける一夏は半端じゃない。かすり傷以上直撃未満と言つたところに抑え込んだのには、正直呆れかえる。

「ひ・み・つよ」

そして別に「龍咆」は「IS」本体の機動に何ら影響を及ぼさないから、私はあいつでも一朝一夕に真似できないほどに磨きぬいた機動を行使しながら、「龍咆」を撃ちまくる。

反撃を許さぬ一方的な連射。それでもあたしは手を一切緩めることなく撃ち続ける。だってあいつは一夏だから、どんな状況にあっても諦めるなんてしないだろう。その証拠に、アイツの耳には今もなお溢れんばかりの闘志が爛々と輝いている。

「試してみるか」

砲撃の隙間、そこに放たれる銃撃、けれど銃口から読み取れる弾道予測にあたしの体は重なつていない。目晦ましの乱れ撃ち？ そう判断したあたしの真横で、銃弾が弾かれる音が響いた。

「え？」

そこにいたのは一夏が放つたであろう銃弾を弾き飛ばした筈の姿。けれどおかしい、たつきのアイツの銃撃に直撃コースなんて一切な

かつた筈、それに何よつ、ビリして真正面から放たれた銃弾が、私の真横から襲いかかるのか。

「さつすが一夏、ほれなおしちゃう」

「気に入つてくれたかよエリー？ オレの大道芸」

「勿論、銃弾のビリヤードなんてお皿にかかるとは思わなかつた」
エリーのその言葉で、あたしは一夏の行為の詳細に気がついた。
アイツは銃弾同士ぶつけ合わせて、弾道を曲げてあたしの真横から
襲いかからせたのだ。

「オレはな、オレにしかできない」とをやつてみたい。HSとオレ、
どちらが欠けてもできないことをやつて見せてこそ、オレはHSに
使われるんじゃなくて、HSを使つてるつて証になる」

そんな心底子供の意地みたいなことをのたまつ一夏。けれどそれは、真つ当過ぎるほどに正論で、無茶苦茶アイツらしかった。

「だらうな、お前ならうつてつて馬鹿をやつそつだつた」

そして篝は、アイツがそれほどの馬鹿だつてのを、誰よりも深く
理解していたからこそ、真つ先にあんな曲芸に対応できた。正直言つて、その仲の悪さに嫉妬しそつだつた。

「はつ、言つてくれるな、篝！――」

「ぬかせよ一夏！――」

そして再び放たれる銃弾のビリヤード。HSの演算能力と一夏の

積み重ねた経験と出鱈田な技量が成し遂げるそれを、簫は刀一本を頼りに切り払い続ける。

当然そんなに打ち続ければ、ハンドガンなんですが弾切れになってしまふけど、一夏は即座に新しい弾倉を量子展開して弾幕を途切れさせない。

どうやらエスに乗つたとしても、一夏と簫は互いを一番の敵だと認識しているらしい。正直言つてかなりむかついた。浮かれまくつているあいつらを横つづらからひっぱたこう。

「龍砲」は空間圧縮による武器だ。だからまずは圧縮率を最大限にして、一夏の銃弾ビリヤードを無茶苦茶にする。勿論距離があればある程空間の歪みは極小の物になつていくけど、アイツのあの芸当は出鱈田なように見えて、精緻極まる照準があつてこそ、たとえ僅かな歪みでも、アイツのビリヤードを崩すには十分だ。

「つむつーー？」

そしてそれは同時に、「龍砲」のチャージが最大限に完了しているという事、そのまま不可視の砲撃を、今度は簫に向けて放つた。

「ぐるりーー！」

どうよ、今のあたしはあんたたちひとつでも脅威なのよ。これからは置いてきぼりにさせないわよ。

「やるじゃねえか、鈴ー！」

「中々外道に染まつてきたな、お前も」

「うつさいーー！ 誰のせいだ誰のつーー！」

「おい簫、お前のせいだつてよ」

「お前のせいだらうが、一夏」

「一人ともじやあつーー！」

「……子供の喧嘩と変わりありませんわね、」の「むこ」

「でも面白そうでしょ？ セシリアちゃん」

「ええ、そうですわね、」それに私たちを蚊帳の外にすると
はいい度胸だと、思い知らせてあげましょう……」

「同じ感、私達除け者にして盛り上がりってくれりやつして、こんな
にいい女を袖にするなんて、これは罰が必要よね」

「ええ、どびきつ痛いのを差し上げましょ」

それから「アーナの使用時間」を「アーナ」を使った喧
嘩にあたしたけは明け暮れた。

「自主的な学習は確かに推奨すべきではあるがな、
限度をわきまえりの馬鹿共が」

まあそれが白熱しそうだった。あたしたちが使ったアーナ
は数日間使用禁止になっちゃった。そりやあ確かに地面はクレータ
ーだらけだし、壁は至るところ縛割れてしまね。

「これからは皿塗しる。出来んとこうなつまじれからは私がお前ら
の相手をしてやる」

そうして千冬さんから全員に拳骨が見舞われて、あたしたちは全
員そろつて悶絶しちやつた。

「うん、本当に痛いわ、千冬さんの拳骨。」

この一夏、基本的に拳銃だけで戦うのですが、それだと話し的に決め手に欠けるというか、インパクトが無いというか、ならどうしようか頭を捻ったところ、「ジューダスにしてしまえばいいんじゃね？」という電波が舞い降りてきました。そのうちきっと「レスト・イン・ピース」とか言い出しそうではあります。

オレにとつて、起點というのはやはりISの登場だったのだろう。姉貴とその親友が作り上げ世に出した規格外の兵器。最強無敵、そんな陳腐な四文字が的確な表現の、いかれたスペックの超兵器。しかもなぜか女にしか使えないという、わけのわからん欠陥を備えもしていた。別にそのこと 자체はどうでもいい。

数がたつたの476機しかないことも、それが世界の戦力バランスを担うことになったのも、それら皆全て別にどうでもいいものだ。確かに、あんな出鱈目な物作つたせいで、俺と篳が離れ離れになりかけもしたが、それも少し抗つた程度で無しにできた。監視対象なんて一か所に固まつていたほうがいいだろ、と姉貴に訴えて、結果、篳は俺達の家に住むようになった。

正直言つて、そうしていなければ俺はどうなつていたかわからない。なぜなら、その頃からちよつとずつ、世間という物が変わつていつたから。

ISがあるから女は強い。女は偉い。だから男は女より弱い。女より下だ。

そんな考えはちょっとずつ、少しづつ、世の中という奴を侵食していく。おまけにウチの姉気が、全国ネットどころか全世界レベルで活躍してしまつた。もとよりバグキャラじみていた姉貴は、瞬く間に世界から脚光を浴びる存在となつた。

もしこれでISが男性にも操縦できる存在ならば、“織斑千冬”

が強いのだと至極当たり前の評価となつたのだが、結果それは女性優位の狂つた思考を助長せる一因となつた。

「男が粹がつてんじやないわよーー！」

「弱い男のくせに」

そんなことをのたまう女性が世に増えて、そういう奴らを見るたびに心底からの吐き気を催した。どうしてそんなことを己の口から吐き出せるのかと、理解に苦しんだ。

相手の欠点を突いて蔑むのはまあ、許容はできなくとも理解はできる。相手の粗を突いて、自分は優越感に浸りたい。下衆だが一応の理屈は通る感情だ。

けど、“コレ”は違うだろ。

自分は女だから、女である時点で男より偉い。そんな物に理屈なんてあるわけない。

ISが使える？ それはISが強くて、実際にISに乗つてる奴が強いと自負するのならわかる。女が強いんじやなく、ISが強いんだ。

つまりは女だから強いんだとのたまう奴らは、相手も、当の自分すら見ていない。筋の通らぬ自己愛によつて、自分は強い。自分は偉いと砂上の楼閣で空しい哄笑に浸る。

そんな奴らが、俺にはどうしても人間に見えなかつた。己には見えぬ何かを頼りに、あやふやで空っぽな自負に酔う連中。木偶人形。そんな奴らはそう呼ぶのが最適だろ。

そんな奴らを見るたび思うのだ。人間つてのはそつじやないだろうと。確かに世の流れに流されることもあるだろ、けど、いつかは自分の足で流されずに立てる奴が人間だ。

だから俺は、眞面目に生きていの奴を認めない。

けれど、あの織斑千冬の弟という立場は、そういう眞面目に生きていの奴らをたくさん引き寄せていった。どいつもこいつも目が曇つている奴らばかり、そんな奴らに辟易していくも 篇だけは違っていた。

周囲からは剣術馬鹿だのなんだの揶揄されても、アイツは自分のやりたいことをやっていた。流されずに自分の足で立っている。そんなアイツが、オレの目には眩しく光り輝いているように見えた。アイツのダチであることが心底誇らしかった。故に、アイツとの勝負は心が躍る。全靈を賭して戦つて、それでもなおアイツは俺と拮抗する。アイツがいる限り、オレは前に進み続けると実感できた。

まあそんな事、口が裂けてもアイツには言えないがな。

今日も今日とて、いつものメンバーが集まつて行われた、放課後の喧嘩じみた模擬戦が終わり、一夏を除く面々は大浴場で汗を流していた。

「チツ、今日も引き分けか」

湯気立ち上る湯船の中で、簾の苦渋に満ちた咳きが漏れる。その

顔と体にはいくつも痣が付いており、今日の模擬戦が一段と激しかったことを如実に表していた。

「…………相変わらずよね、アンタと一夏つて

何せ今日の模擬戦の顛末は互いに武器を破壊され、弾き飛ばされた二人による、ISを使っての殴り合い。量産機とはいえスラスターの出力とパワー・シストを乗せての殴り合には、こうして互いの体に痛々しいほどの痣を残していた。

しかしそれは、一夏と笄にとつてはいつもの事。それを一番よく知っている鈴にしてみれば、ああまたいつものオチかという感想しか持てない。ちなみに今日は、互いに渾身の右ストレートによるクロスカウンター、そこからのダブルノックアウトという顛末だ。

「相変わらずといふ」とは……」これまでも？」

「うんそう、笄と一夏つて事ある」とに勝負するし、その時は笄が鉄芯入りの木刀で、一夏の馬鹿はどつからか手に入ってきた実物の銃使ってね」

鈴が平然と言った言葉の内容に、セシリアの整つた柳眉が歪む。はつきり言ってそれは勝負という言葉の内容からあまりにもかけ離れたもので、とてもではないが許容できるものではない。

「正気ですか？」

「馬鹿だから正気じやないんでしょう？ 何せ笄ときたら模擬戦用のプラスチック弾頭を平然と木刀で弾き飛ばすもの。はつきり言って馬鹿よ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言つな、ウリ坊」

「いやー、私も鈴ちゃんの言葉に同意するわ

「…………ウリーもか」

「私もです、もう一度言いますけど正氣ですか？」

「…………ふん」

周囲からの総攻撃に、簞は膝を抱えて口元まで湯船に沈む。口から漏れる空氣の泡が、簞の不満を表しているようだった。

「と、うか、お一人はどうしてあそこまで戦つのですか？」

セシリアの疑問は当然のことだろう。二人のそれは最早模擬戦や喧嘩などという言葉の範疇に収まるものではない。殺し合い、と評していいほどに苛烈で白熱した物だ。

「別に、ただアイツに負けたくないだけだよ」

けれど、簞と一夏の当人同士にしてみれば、その一言だけで説明が付くし納得できる。眞実二人の間にあるのはそんな単純化された感情で、その奥底にあるのを説明付けられるは、この二人をずっとそばで見続けてきた者だけだろう。

「ま、単純にいえばそうだけど、負けないってのは先に立っているってことで、そうすれば片方も必ず追いすがつてくる、負けたくないってのはつまり、一人で一緒に先へ進みたってことの表れなのよ」

そう、鈴はこの一人をずっとそばで見続けてきたのだ。だからわかる、この二人の負けたくないは自分の為でもあるけれど、互いの為でもあるのだと。お前はここで終わる奴じゃないだろう、だから俺／私が先に進んでやるから追いかけてこいや、そんなあまりに馬

鹿らしい思いを、二人は懸命に抱き続けているのだ。

「プツ……ククツ……」

「あはっ、あははははっ……」

そんな事を聞かされでは、セシリアとエリーが笑うのも当然だ。高校生になってまで、そんな子供の様な気持ちを懸命に抱き続けているなんて、なんておかしくて、馬鹿らしくて、そして

素晴らしいのだろう。

ああ、ならばあれほど一人の戦いに熱が籠るのも納得できようという物だ。それぐらいの愚かしくも輝く思いでなければ、人はあれだけ懸命になりはしないだろう。

「成程、一人は親友なんだね」

「そうですね、その言葉こそがぴったりです」

得心がいったと、そんな表情を浮かべるセシリアとエリー。二人の心中にあるのは、そんな関係を結べている一人への賛辞と羨望だ。恋愛感情などという言葉では結べない、苛烈で傷だらけの物ではあるけれど、そんな思いを結び合える存在がいることにかけ値なしの祝福を送りたいとすら思える。

「…………勝手に言つてろ」

そして笄の顔が真っ赤に茹だっているのは、きっと湯船の温かさだけではないのだろう。

「そりいえばおの一夏さんはどうしているのかしら？」

セシリアが会話に上り続けていた一夏の現状を気に欠ける。学園

唯一の男子生徒であるが故に、当然大浴場での入浴許可など下りはしない一夏は、模擬戦が終わつた後ふらりと姿を消してしまつた。

その一夏の行動は、基本的に毎日がそうであり、セシリ亞は常から彼のそんな行動が気にかかつてゐた。

「……知るか、そんなこと」

その問い合わせはそつけなく答える。しかしその様子には、何故か欺瞞が含まれている様に気がしてゐた。しかし、笄の様子からしてそれ以上は答えることはないだろうと、セシリ亞はあたりを付ける。

「ああ、一つ言つてあげるはセシリ亞、アイツはね、古臭いのよ」

代わりにその疑問に答えたのは鈴だ。その中に含まれていた古臭いという単語が気に掛かり、セシリ亞はそれをオウム返しに口にする。

「古臭い？」

「そう、アイツはかつこつけだからね、女の子の前ではカッコ悪いところを見せたがらないのよ。アンタみたいに誰かの目がある所じや、見栄張りたがるタイプなの」

一夏は真面目だ。素行とか外見などではなく、物事に対する姿勢が真面目だ。そんな彼が、自らが強くなるのをただ口を開けて阿呆の様に待つてゐるだろうか。

そんなことは、例え天地がひっくり返りうともありえない。織斑一夏は座して待つだけの人間ではない。求める物を自らの足で進んで勝ちとりに行く人間だろう。

「成程
見栄張りですわね」

最早セシリヤの心情に、一夏への嫌悪感などない。その見栄つ張りで意地つ張りな人格に、混じりけなしの好感を得られるぐらいには。

「そういうところがいいんじゃない。カッコいいじゃん」

エリーは勿論、一夏のそういうところを知っている。彼のそういうところが心底気に入つたのだから。

アリーナの中で、未だ動く機影があった。

一夏の駆る「ラファール・リヴァイブ」が、初步的な機動を幾度も幾度も繰り返している。急加速・急上昇・急下降・急旋回、教本通りの初步的な機動を、丁寧に丁寧に繰り返し、それをひたすらにやり続けていく。

常の一夏からは想像もつかない、それは地味と言える光景だった。時に制御を謝り、頭の中に描いた機動とかけ離れれば、それをアリーナの監視カメラで確認し、客観的な視点からどこにミスがあつたのかを事細かに確認する。

そしてまた失敗した機動を繰り返していく。体力よりも精神力を削っていく、明確な進展も何も無い練習を、一夏は無表情で黙々と繰り返していく。

「……ふう」

そうしてアリーナの使用時間ぎりぎりまで自主練習を行い、少し

でも IIS という兵器の操縦に習熟していく。

最大速度から地面から一センチの距離での旧停止をやれば、時には地面と痛烈なキスをし、より鋭角な急旋回を行おうとし、間接に鈍痛を走らせる。それらの痛みは一夏にとつての糧であり、決して避けては通れない物だった。

もとより知識面では一般入学でこの IIS 学園に入つたどの生徒よりも、一夏は劣るだろう。男であるが故に、IIS に関する勉強など全くやつたことはない。そんな自分が彼女たちに追い付こうと思つたら、それはもう男だからこそできる痩せ我慢で、必死こいて追い付くしかないだろう。

おまけに量産型とはいえ、自分だけの機体もある。そんな物を押し付けられたとはいえ、それを無為に腐らせるのは、一夏にとつて我慢ならないことだつた。

全く不満のない人生なんて、女子供の夢物語にしかないだろう。ならばそつ、気に入らないことがあってもそれを飲み干して、足搔いて、前に進み続けることが人生だろう。

(……飢えや不満なんぞ、人生に付き物だろうが)

だからこそ、普段は悪態ばっかりついて居る千冬に対して頭を下げ、アリーナの使用時間を延長してもらい、できる限り自らを追い込む。他の誰かはもう通つた道だと自分を叱咤し、無様であろうとも練習を黙々と続ける。

それなりとはいえ、素人同然の機動を行い続ける一夏の姿は、確かに無様と言えるだろう。それでも、そうして積み重ねていく修練は、決して一夏を裏切りはしない。必ず一夏の血肉となつて、いつか花咲く日もあるはずだ。

それになりより、一夏のその姿は眞面目で、そつ呼ぶふにふさわしい姿だった。

常日頃一夏が血食する「眞面目に生きていこう」と二つ言葉に違わぬ姿。

「頑張つてゐるね、色男」

「なんだ、エリーかよ」

最初に出会つた時には気付いた自分の隠行に、全く気付かないほど没頭していた一夏。

「ほり、喉渴いてるでしょ？」

「……おひ、サンキユ」

常日頃叩く軽口も鳴りを潜め、一夏はエリーから投げ渡されたスボーツドリンクをどうにかキャッチする。既に満足に体を動かすだけの体力もないのか、表情だけはどんとか平静を保つてゐるもの、そのおぼつかない手つきが一夏の消耗ぶりを如実に表していた。

そういうところを晒してしまつたことが一夏の表情を、苦虫を噛み潰したようなものに変え、それをエリーは愛おしそうに見つめている。

「チツ

「拗ねない拗ねない、いいじゃない、そういうところを見られたつてさ」

「やつぱりさ、こいつは見られたくなかった？」
「当たり前だろ？ 男はいつの時代もカツコ付けばかりなのぞ」
「でもさ、ウリ坊ちゃんや篠ちゃんは気付いているみたいだったわよ」
「それでも気付かないふりしてくれるあたり、アイツ等っていい女だと思つぜ」
「じゃあ私は悪い女かしら」

そう言ってニヤリと笑うエリーの表情は、確かに悪い女の、魔性といつべき笑みだった。

それを見て一瞬、一夏の表情に思案の色が浮かぶ。さてどうしたものか、先程までの姿を見られて、このままずるずるとペースを握られ続けるのはしゃくだと、いつもの様に無駄な負けん気を発揮して、一夏は悪戯を考えている時の様に思考を加速させた。

「そうだよな、人の懷にずかずか上がり込んで、こうなりやお前の奥底も見ないと釣り合い取れないな、ベッドの中での、とか」

「やりと、これまたエリーと同じように性質の悪そうな笑みを浮かべて、一夏はエリーに詰め寄った。

「あら、積極的ね」
「いけないかい？ イイ女がいるのに手を出さないってのは、逆に失礼だと思つんだがね」
「それじゃあ篠ちゃんは？ ウリ坊ちゃんは？ あの子たちもイイ

女なんでしょう」

「ああ確かにそうだけど、篠でオレの息子おつ勃てる自信ないし、
ウリ坊は色氣より可愛さが先に来るだろ、そういうふうに見れね
えよ」

「酷い言い方、悪い男ね」

互いにかわす、ともすれば下品とどちらかねない言葉の応酬だつ
たが、それでも互いに奥底の心理を理解しているために、決定的に
そういう結果にいたづくための色氣が不足していた。

「
　　駄目だな
　　駄目ね」

つまりは、三文居では雰囲気を作れないということだった。双方共に笑みを消し、疲れたように溜息交じりの否定の言葉を吐き出した。

「今日はもう限界かね、これは」

「そうねえ、ベッドの中で本当に寝た方がいいわよ」

「だよなあ、このまま突入しても絶対勃たねえ。それは男として恥
ずかしすぎる」

「アリーナの施錠は私がしておつからひ、今日はもう帰っちゃいな
さい」

「あ～あ、つづづくカツコ悪い」

「そつかしら、決めるべき時にカツコよく決めれる奴が、本当に力
ツ「よくていい男だと思つけど」

「前言撤回、やっぱお前いい女だわ」

「今頃気づいた？」

「いいや、そんなの最初から気付いてた。……それじゃあ悪いけど後頼むわ」

「ええ、おやすみ一夏」

「ああ、おやすみ、エリー」

交わす別れの挨拶。同時に一夏の顔がエリーの顔に急接近した。吐息がかかるなんてものではなく、ほんの僅か零になる一人の距離。期すとすらいえない、ほんの僅かの接触をエリーの頬に残し、今度こそ一夏はアリーナから出ていった。

「じゃあ今度」
おやすみ、エリー」

三文芝居で気が抜けて完全に無防備になつたエリーへの、それは一夏の完全な不意打ちだった。

そういう雰囲気でこうこうことをやられても、エリーは決して動搖しないだろう。そんな状況ならば、来ることが分かっているなら、エリーは自分のプライドにかけて無様に動搖なんてしないだろう。だからこそ、そういう警戒をはぎ取つたところに打ち込まれたこの不意打ちは、エリーの精神を完全に動搖させた。

「…………え？」

そんな咳きですら、発することができたのはアリーナから一夏の姿が消えた後。未だ頬に一夏の唇の感触が残つてゐる様な気がして、エリーは思わず自分の頬を撫でた。

ようやくそこで、自分が一夏にキスされたことを自覚したエリーは、ついでに頬を撫でる自分の掌に熱いものが当たつてゐる感触も自覚した。

「私、キスされちゃった?」

言葉にすれば、一層掌に伝わる温度が上がったような気がした。普段の飄々とした雰囲気からは想像もつかない、恋に疎い一人の少女の姿を晒し、それを自覚してしまって自分に一層エリーは混乱する。

「い……一夏の馬鹿」

誰もいなくなつたアリーナで、一人寂しくそう呟くのはあまりにも間抜けだつたが、今のエリーはそれぐらいしかできなかつた。きっと一夏はこんな自分を想像していたのだろうと思つと、今手元にハンカチがあれば噛みちぎりそつなほどに悔しかつた。

「じつちが、年上なんだよ?」

女のプライドとして、年下の男の子にじつまで手玉に取られると、混乱が収まつてくれれば悔しさが真つ先にこみあげてくる。

「あ～でも、今更じつじつしに行くのもなあ……」

そんなことをすれば余計に手玉に取られる予想しかできない。「何だエリー? あれぐらいのキスで動搖するなんて結構初心なんだな」とか、「あれぐらいじや満足できないってか? いいぜ、今のお前ならその気になれそつだ」とかのたまつ一夏が、エリーの脳内で鮮明に再生される。

「あ～もじつ……一夏の馬鹿つ……」

一度鱗が入つた心はそんな想像だけでも揺さぶられ、エリーはそ

の動搖を吹き飛ばす様に今一度、大声で一夏を罵った。

『何だ、可愛いところもあるんじゃねえかエリー』

そこにちゅうど、アリーナの館内放送から一夏の嗜虐心に満ちた声が響く。恐らぐ、あのまま帰るふりをしてアリーナの管制室に忍び込み、エリーの痴態をニヤニヤと眺めていたのだろう。

「…………え？」

先ほどキスされた時の様に長い沈黙の後に絞り出した咳きが、再びエリー一人だけがいるアリーナに流れた。

「見てた？」

『勿論』

「…………一夏の馬鹿、乙女のあられもないところ覗き見るなんて」

『お前だつて俺の力ツコ悪いところ見ただろ？ これでキャラだよ』

「一夏のエッチ」

『思春期の男なんて皆そんなもんだろ？』

「一夏の馬鹿」

『おつ、よく言われる』

「一夏の変態」

『うわ、ひつでえ』

ああダメだ、とエリーは痛感した。既にペースは一夏の物、これ以上何をどう言つてもこのペースを崩せそうになかった。

「ふん、さつさと自分の部屋に帰つて寝なさいよ」

「あへ、お前の可愛い姿も十分堪能したしな、今度こそおやすみエリー

「…………おやすみ一夏」

その応酬を最後にあつたと一夏はマイクを切り、今度こそアリーナにはエリー一人となつた。

「今度何かあつたら、絶対私がペースを握つてやるんだから

アリーナの中心で気炎を燃やすエリー。まあしかし、その姿も一夏がみれば可愛らしいとしか映らないものであつた。

第四話（後書き）

＜あとがき＞

きつと同狼つて本質的には努力家だと思つんですよ。けれど何で
もできだし、できてしまつたからそんなことすらできなくて、だか
らこの世界では、女連中に見られないところで努力してゐつて感じ
です。まあ、そんなの周りにはばればれなんですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569z/>

Dies irae × I S

2011年12月25日16時46分発行